鳴門教育大学研究紀要
第30巻　2015

現代の若者の不安の根底にあるもの

―― 日本的な自我の強さを獲得するための方策を探る ――

今　田　雄　三

（キーワード：現代社会，青年期，不安，一体感，宗教性）

1．はじめに

筆者は先に，最近の若者にみられる傾向として「『素の自分』を守ろうとすることに慎重なあまり，他者との間で表面的なコミットメントしか取ろうとしない」が，それは「相手の望むように自分を変えよという外圧に対して，表面的に同調してスルーする」という戦術であり，「最近の若者は批判に弱い」という印象の根底には，他者からの批判を「そのままの自分でいてはいけない」「『素の自分』は尊重されていない」という他者からの否定と受け取ってしまうことによる二次的な自己肯定感の低下が関係しているのでないかと推察した。またこのような最近の若い世代特有の不安について，個々人の資質の問題に還元して批判されるべき筋合いのものではなく，「人と人の間に存在し，人と人の関係をつなげ，自分の主体性を活性化する，個人的なレベルを超えた力に自分は確かに支えられている」という実感，確信そのものを欠いており，「頼るものは自分自身の力以外には何も見いだせない」ことに由来するのではないかと述べた。さらにその背景には「近代的な人間観というものが，あまりに個人としての人間存在・主体性というものを重視するあまり，個人的な力でもってあらゆる困難を克己する自立した人間像のようなものだけが強調され，結果『個人的なレベルを超えた力の存在』が等閑視され，人と人とのつながりを根底で支えてきた力がどんどん弱まってきている影響が，我々の社会全体に及んでしまっている」事態が想定されると指摘した（今田，2013）。ただし，あらためて拙論を読み返してみると，「個人的なレベルを超えた力」とは何を指しているのかについての具体的な説明が不十分であるなど，やや抽象的で思弁に流れるきらいがあるように思われる。今一度，理論的背景を厚くした上で子細な論考を試みる必要があるだろう。

そこで本論文では，河合隼雄による一連の文化論の中で行われてきた現代日本社会への提言に注目し，特に河合の思想が円熟した晩年に述べられた日本社会および日本人の心の問題について，河合が見据えていたテーマとは何かを明確にしていくことにする。そして，河合隼雄という「日本人のこころ」の問題に生涯にわたって取り組み続けた巨人の肩に乗ることで視界が開け，我々凡夫にも現代青年が抱える不安の根源にあるものの姿をより鮮明な像として捉えることが可能となり，かつそれをいかに乗り越えるのかについての展望が地平の彼方におぼろげに見えてくることを期待したい。

2．現代の若者の不安を河合隼雄の晩年の日本人論に照らして考える

⑴　思想家としての河合隼雄

日本を代表する臨床心理学者である河合隼雄（1928～2007）には，日本文化論についての著作も数多く存在し，思想家としての一面をも有しており，没後に『思想家河合隼雄』という一書も編まれている（中沢・河合，2009）。思想家としての河合は日本社会についてさまざまな論考を行っているが，特に人間の心のなかに父性と母性という対立原理が存在し，わが国はむしろ母性優位の心性を持つことを指摘した『母性社会日本の病理』（河合，1976），西洋人の心性が中心統合的なモデルに合致するのに対し，日本人の心性は中空構造的なモデルとして捉えることが出来ることを示した『中空構造日本の深層』（河合，1982）などが代表的な著作として挙げられるだろう。その後も河合はその時々の社会情勢に呼応し，その背景に想定される日本人の心性についての発言を絶えず発信し続けていたが，本論文では特に1995年*以降の現代日本社会について発表された河合の論考の中から，前項で指摘したように現代の若い世代の心にみられる根源的な不安についての理解を助けるような内容の指摘を可能な限り探し当てて，以下で紹介しつつ検討を加えていきたい

＊この年に阪神大震災，オウム真理教事件という我が国を震撼させた大きな出来事が相次いで発生し，以来現

在に至るまでその不安は日本人の心を覆っているように思われる。

⑵ かつての日本社会における「守り」のシステム

河合（2013／初出2008）は，2006年に収録された生前最後のインタビューの中で「今はどうかというと，子どもに対する守りが弱くなっていますね。個人的な母性が弱い状況が，どんどんひどくなってきてます。今は母性に対してむしろ否定的にみる人が多いわけでしょう。というのは，母性社会を逃れようとみんな思っているから，母性そのものに対して，男も女も否定的になってるんですよ。結果としてそれが個人的な母性まで否定することになってしまって，子どもの守りが弱くなっているんです。（中略）母性を考えるときに気ィつけんといけないんですけど，元型というのは，人間の心の深層にあって，個人を超えているわけです。それに対して「守り」というのは，個人と個人の間のことなんです（傍点筆者）。そして，お母さんと子どもという個人の人間関係があることが，子どもが肉の渦で表されるような母親元型に取り込まれることを防いでいるわけです。人間関係は，元型みたいに人を取り込んだりできませんからね。だから，母親元型に取り込まれるような子どもの場合，お母さん個人の母性はむしろ薄いといっていいぐらいです。お母さんの守りが弱いから，心のいちばん奥にある元型が上がってくるわけです。のみ込むとか，取り込むとか，母性の非常に根源的な恐ろしい側面が出てくるわけです。そのへんをひとつひとつ，ふまえて考えないと，混乱が大きいんじゃないかなと思いますね」と語っている。

ここで河合が述べている「守り」という言葉は，母親と子どもという個人と個人の間に働いている心理的な力のことであり，筆者の言う『人と人との間に存在し，人と人とが関わる上で働いていた，個人レベルを越えた力』という概念とかなり近いものと言えよう。この「守り」の力が働いていることにより，河合が専門とするユング心理学において，人間の心の深層である集合的無意識の次元に，個人を超えて普遍的に存在するとされる元型的な力が暴走し，子どもの心を圧倒する様な事態を防いでいるというのである。また上記のインタビューの中で河合が用いている「母性」とは，「包含」する機能によって示される原理であり，すべてのものを良きにつけ包み込んでしまい，すべてのものに絶対的な平等性を与えることを本質とする原理であり，日本社会は母性優位の心性を持っている（河合，1976）。つまり我が国においては，誰でも基本的には母性優位であることに親和性を有しており，男性であっても母性的な側面に縁遠いという訳ではなく，ある子どもに対する「母性」を考える際，実母個人の母性に全責任を負わせるのではなく，社会全体に働いている母性を含めて考慮するべきだということになる。このことについて河合（2013／初出2008）は，同じインタビューの中で「お母さんからある程度離れたとしても，日本の場合，地域・世間が抱き込んでいたわけです。昔のお百姓さんの家は忙しいから，お父さんもお母さんも，そんなに子どもにべたべたしとられへんですね。けれど，家全体・地域全体が母性をもっていたわけでしょう。それをさらに自然が取り巻いて，いろんなものが子どもを守っていたわけです。都市の周りもまだ自然が山ほどあって，東京でも，三角ベースで野球をするところがあって，腕白坊主がおって，ということでみんな守られていた」と語っている。改めてまとめておくと，かつての日本においては子育てにおける母性は，母親個人が全てを担っていた訳ではなく，伝統的な社会の仕組みやシステム全体も「守り」として母性的に機能していたと河合は指摘しているのである。

さらに河合（2013／初出2008）は同インタビュー内で，最近の我が国の個人主義的傾向について「戦後，家族のしがらみを切りすぎて，関係がなくなってきたんです。日本的なしがらみを切って，あとに何的関係ができるかということを考えなかった。日本はとほうもないことをやってると思いますよ。しがらみを切ることを熱心になりすぎた。でも，しがらみを捨てたところで，もういっぺん，親子，夫婦，親戚，友人，それがどうつながるか，それについての努力と工夫が要るんですよ。ただ，それなら昔に還ろうといっても絶対にできひん」と指摘している。この発言から，戦後の日本において共同体におけるつながりのネガティブな側面を否定し，捨てていったことにより，同時に共同体のポジティブな側面も機能しなくなり，『個人と個人の間に存在し，個人レベルを超えた大きな力』の存在を置き忘れられ，可視的な『個人レベルの力』のみの存在を前提とする社会に変化するに至った経緯が明確に示されているように思われる。このような現代社会においては，「母性」という言葉が母親個人の人格にのみ帰属する属性として理解され，母性に関する責任は全て母親一人が背負わなければならないという風潮が極端に強く，それが弊害というレベルに達しているようにすら感じられる。母親個人の人格に帰属する母性とは，言い換えれば『個人と個人の間に存在し，人と人とが関わる上で働いている，個人レベルの力』ということになる。もちろん現代においても，この『個人レベルの力』がなくなってしまった訳ではない。むしろ逆に『個人レベルを超えた力』が働きにくくなっている分だけ，人と人とがつながろうとするのであれば，頼りとするものはこの『個人レベル』の力しか残されていないのである。よって現代に生きる我々は『個人として』相当の努力を費やすことで辛うじて人と人とのつながりを確保出来ているのであり，それによって著しく消耗を

きたしているようにすら思われる。

筆者の個人的経験からしても，かつての日本社会では，人と人とが一定の時間と空間を共有するならば，そこまでの個人的努力を費やさなくとも，比較的自然につながりや人間関係が成立していくのは当然だという意識が共有されていたように記憶している。要するに，「袖すり合うも多生の縁」といった言葉で表されるような信条がかつては社会全体で共有されていたことで，人と人とのつながりが「守り」として機能していたのである。このような，共同体におけるつながりが機能している時代においては，筆者の言う『人と人の間に存在し，人と人とが関わる上で働いていた，個人レベルを超えた大きな力』とは，日常的に，ごく当たり前に働いていた力であり，個人にとっては頼りになったり，助かったりする一方で，面倒くさく束縛的なものでもあったりしたものを想定している訳である。こう書けば，おそらくある年代以上の者にとっては，ほとんどこれ以上の説明は要しないのではないかと思われる。なぜなら自分もかつてはそのような共同体の中で生まれ，過ごしてきた中で，この種の「つながり」や「助け」や「しがらみ」をごく当たり前に体験してきているからである。ところが，この論文を執筆している2014年という「現代」において，たとえば筆者が子ども時代に経験したのと同じように共同体が十全に機能しているとは（河合も指摘している通り）到底思えない。つまり今の子どもたちは，共同体のつながりが機能している社会を実体験としては記憶しておらず，そこに身を置いていれば当然に感じるであろう『人と人の間に存在し，人と人とが関わる上で働いていた，個人レベルを超えた大きな力』を実感したことがない，ということになる。これは考えてみれば当然のことであるが，現代の子どもや若者たちのことを理解しようとする時，この大前提を忘れてはならないということを改めてここで確認しておきたい。

⑶ 日本的な一体感について

ここで河合（2001b／初出1997）が，「人間は『この世』に一人の人間として好き勝手に生きているだけでは，どうにも不安定であって，自分という存在を何らかの自分を越えた存在に根づかせる必要があるようだ」と指摘していることに注目したい。そしてキリスト教文化圏においては，それを唯一の人格神との関係（人間が個人としていかに多くのことをなし遂げようと，それは常に神の目に曝（さら）されている）によってなしとげてきたのに対し，個人を根づかせるもうひとつのわかりやすい存在は血縁関係による家族，あるいはそれが拡大された部族ということになり，日本の場合には特有の「イエ」制度が重要な役割を果たしてきた。それは必ずしも血縁によるとは限らず，結構能力主義の考えを取り入れて養子を迎えたり，必ずしも長子相続とは限らない方法を用い，「イエ」の存続のために苦心が払われた。各人はその「イエ」に所属し，死んだ後は，そのイエの「御先祖」になるという形で安心感を持っていたという（河合，2001b／初出1997）。

また，河合（1998b）は，人間の「関係」について考える際の二つのモデルを挙げて説明している。まず一方には「『関係』と言えるのかさえ明らかではない，一体感を基礎とするものがある。一番わかりやすいモデルは母と生まれてきた赤ちゃんの関係」で，「これは包み，包まれる関係とも言える。それが大人になっても片方が包む役で，他方が包まれる役というのではなく，二人が何かによって包み込まれて一体化しているようなときがある。その包みこむものが，たとえば『家』であったり，『土地』であったり，『××組』と称される集団であったりする。その中では感情的同一化が強く，言葉で表現しなくても，考えを伝えることも可能である」ような関係が存在する。それに対して，他の「関係」は「個人と個人がまったく独立しており，その関係は言語によって明確にされる」ようなものである。そして，人間はこの両方の人間関係を適当に混合しながら生きているが，特に後者の関係を洗練させ，高い価値を築こうとしたのが，西洋近代の個人主義の考えである。そして日本人は相当に西洋流の個人主義で生きていると思う人でも，まだまだ感情的一体感を基礎とする人間関係を生きているということを指摘している。ちなみに，河合がこのような指摘を行ったのは，1995年に発生した阪神大震災において略奪，暴動がなかったことや，人々が秩序を守って行動したことをどう考えるかということをきっかけとしており，本稿執筆時より約20年前の日本社会に対しての発言ということになる。この時点においても，日本人はかなり西洋的な個人主義の影響を受けており，意識的には個人主義的に振る舞っていても，まだまだ根底では感情的な一体感によって支えられていることをいざという時には実感できていたということを示していたと思われる。

⑷ 一体感による支えが希薄となった現代の思春期像

それから約20年が経過した今，日本人の感情的な一体感は，特に子どもや若い世代においてどのように変容しているのだろうか。それに関しては岩宮(2009)の，現代の思春期像を活写した著作が大いに参考になるだろう。そこでは，旧世代に属する大人にとってはどのように理解してよいか思いあぐねるような，今どきの「フツーの子」の姿が鮮明に映し出されている。たとえば，「防衛的でも拒否的でもない」のに「自分の気持ちや悩みとい

った内面的な話ができにくい子」や，「パッと言ったことに反射的にパッと通じることを望み，相手が知らないことに対しては，わかってもらおうという努力をしよう」とせず，「こころをつなぎ合わせてそこで何か大切な関係を紡いでいくというプロセスを面倒な労力に感じて，積極的には望まない子」が増えてきていることや，子ども自身が葛藤を抱えること一切やめて，悪いことをした自分を「なかったことにする」という例，あるいは「同級生のなかで自分がどんな位置にあるのかということだけが自分を学校のなかに定位させるための唯一の拠り所になっている」ようなタイプの子では，「学校での人間関係のストレス」も強く，「どんなにグループの居心地が悪くてもそこから除かれないために，信じられないほどのエネルギーを使う」のだという例，クラスで仲良しのグループが出来，１年間楽しく過ごしてきたのに，進級でクラスが別々になるかも知れないということで友だちの「解散式」を行い，今までの関係をリセットしたことに対し，あまりに他の子たちには葛藤がなく割り切りがよすぎる，「影のない友人関係」にとまどい相談室に訪れた例，などが挙げられている。

さらに岩宮（2013）では，社会学者の土井隆義による『人間関係の規制緩和』が進んでいるという言説を引きつつ（土井，2004），同じクラスや同じ部活だからというくくりに縛られる（＝人間関係の規制に縛られる）ことなく，「自分がつきあいたいと思う人とだけつきあえばいい」という感覚が広まったことで，「友だちを選ぶことができるという自由」を手に入れた反面，「ただそこに所属しているだけで自然に人間関係ができるというわけにはいかない」という状況も生まれてしまい，「みんな自己責任で人間関係をつくらなければならなってきた」という「すごいストレス」に曝されている現状が報告されている。「つまり，ひとりでいるのは誰からも選ばれていないということになってしまうのだ。そして，ひとりでいる自分のことを人は『誰からも選ばれていない人』と見ているのだと思うと，それは何よりも耐え難いことである。今の子どもたちを消耗させている人間関係のストレスは，このような背景をもっている。そのため，ひとりでいるところを見られたくないというのも，よく話に出てくる。（中略）このように，周囲の，特に親しくもなければ，遠くもないという中間的な立場の人たちから，あの人は孤独な人ではないという視線での『承認』を絶えず必要としているのである。ここに，新しい形での対人恐怖のありようを感じるのである。最近の若者が，対人場面や葛藤からすぐに逃避して，ひきこもる方向に走ってしまう背景には，このようなことがあるのではないだろうか。周囲の人たちとの間に存在するはずの共同体の感覚がもともと無いか，薄くなっているため，個人レベルで受け入れられるか受け入れられないかという問題が過酷なまでにクローズアップされてしまうことがある」ことについて指摘を行っている。

このような若者の現状に直面すると，大人の世代である我々からは理解不能で混乱に陥りそうにすらなるが，ここで河合の指摘している「日本人における感情的一体感」という視点を持って，この一見理解しにくい若者たちの姿を見つめ直してみてはどうだろうか。すると，現代の若者たちは「感情的な一体感」による心の支えを十分に持ち得ていないであろうことは容易に想像がつく。だとしたら，そのような不安定な自分を根づかせるため，若者たちなりに必死で何らかの対処を行おうとしているのだとは考えられないだろうか。大人から見ると不可解で理解不能にすら思える事象についてさえ，「そうしなければ，（かつての世代とは違って）一体感によって支えられていない自分を保つことができない」という懸命な行為であると捉え直すことが出来るのではないだろうか。

ここで，本項の最後に，岩宮が報告した現代の思春期像についてまとめ，簡潔に言い直してみると，「自分の内面を把握し言語化する能力や，他者とコミュニケーションを積極的におこなっていくモチベーションの低下」「葛藤を抱えることを一切放棄するか表面的なスキルで乗り切ろうとする姿勢」「人間関係の規制緩和により友だちを自由に選ぶことができるようになった反面『誰からも選ばれない自分』に陥ることを恐れ，絶えず他者からの承認を必要とする」といった傾向が存在するということになろう。こうした特徴を端的に表す言葉を探してみると，「自我の弱さ」という言葉が真っ先に浮かんできたことを正直に告白したい。あるいは「回避的」「受身的」「主体性の乏しさ」といったネガティブな言葉ばかりが浮かんできてしまう。だが，これは決して現代の若者を貶めようとする意図からではなく，それだけ現代の若者が直面している課題が過酷で困難であるため，正面からそれにぶつかっていき，力業で突破することが著しく困難であることと，20年前頃までは辛うじて命脈を保っていた「一体感による支え」の加護を失ったことへの対処が若者の個人的な努力によってのみ試みられており，新たな枠組みが全く提示されていない現状の率直な反映だと考えて頂きたい。

⑸ 生活と根源一体となった宗教性

本項では，日本人をかつて支えていた「一体感」の背後に存在したであろう「宗教性」について考えてみたい。河合（1997b）は，「自分自身とのかかわりを切ることなく事象に接し，そこに自分の存在を超えるもの，あるいは，少なくとも自分の知的理解を超えるものを感じとり，あくまでそれを避けることなく理解しようとし続け

る態度を『宗教的』であると考える」としている。つまり特定の宗教集団に属するのではなくても，このような態度をもつことを『宗教性』だと考えるのである。これは極めて個人的なものであり，またすべての人間にとって必要なことであり，さらには「子どもたちが幼いときから，宗教性をもっていることがわかる」とも指摘している。この指摘を本論文の冒頭で紹介した筆者（今田，2013）の記述と合わせて考えると，現代の若者が，個人的なレベルを超えて人と人とを結びつけている力の存在を実感出来なくなっているという事態は，ある意味で『宗教性の危機的状態』と考えることも出来るのではないだろうか。ちなみに河合は，2005年に行った講演の中で「何と言いましても，『黙っていても一体だ』というこの感じが，今まで日本人を支えてきたのだということです。それを体験していない子どもたちは本当にかわいそうです。そういう子のためには，われわれは，まずそこから始めなければならないという気持ちが要るのではないでしょうか」（河合，2007）とも述べ，宗教性を背後に持つ一体感が失われたことが現代の子どもに及ぼす深刻な影響について言及している。

ここで，もう少し別の観点から日本人特有の宗教性について考えてみると，河合（2001a）は，「人間が生きていく上で，何らかの宗教が必要であり，それは教典や儀礼などを通じて教えこまれると世界の多くの人が信じてしるなかで，日本人はよほど特異なのである（中略）日本人は宗教が日常生活と著しく混ざっていて，本人も意識していないのに，宗教的な言動をしているのだ」と指摘し，たとえば「もったいない」「いただきます」といった日常の中の言葉でさえも，一神教のように明確な超越者の存在を意識しないのだが，あいまいな形で，自分を超えたものに対する感謝を表現しているのだという。また日本人の場合，自然のうつろいに対してきわめて敏感であり，それに美的感覚が結びついて，日常生活のなかでもそれに呼応するかずかずの行事をもっている。「日本では，茶道，華道などという考え方があるように，お茶を飲むとか花をアレンジするとか，欧米であれば日常生活に属することが，『道』という超越的な考え方と結びついてくる。このようなことをベースにしているので，家庭内における日常活動が，知らず知らずのうちに広い意味の宗教につながってくるのである」と述べた後，「現代における，日本の多くの青少年の問題の背後に，日本人のこれまで無意識に維持してきた宗教観や倫理観が壊されつつある問題がある」と指摘している。これはつまり「生活と宗教が調和している社会では，生活の仕方が変われば，それがそのまま魂のあり方にも影響」する（河合，2002）からである。そうした変化が日本人に及ぼす影響について宗教学者の鎌田東二は，河合隼雄も参加したあるシンポジウムにおいて「日本人の存在感覚，大いなるものへの感覚が，どういうものであるのかわからなくなると，つながりや存在の基盤が全部切れて，生き生きとした関係性が見えなくなってしまう。そこでは，自分がどういうところに位置しているか，ポジショニングがまったくわからない。そのような，自分自身が行方不明状態になっている」（鎌田，2006）ような状態が映画『千と千尋の神隠し』で描かれているのではないかと述べている。そしてこの「自分自身が行方不明状態になっている」状態というのは，前項で紹介した岩宮（2009；2013）が報告した思春期像の特徴を端的に言い表す言葉にもなっているように思われる。まさに現代の子どもの問題とは，ある意味では宗教性の問題であるということを示唆しているのではないだろうか。

⑹ 現代において宗教性を深めることの困難

さらに河合（2001a）は「あくまで個人としての宗教性を深めることを重要と考えてみてはどうであろうか。（中略）まず，自分という存在が何かにつながり，何を支えとしているのか，それはどれほどの永続性をもつのかについて考えてみてはどうか」と述べている。これは貴重な問題提起として受け取る必要があるだろう。つまり，最近の若者の心の問題の背後に宗教性が関わっているのだとしたら，その若者の言動や心の動きについて，それが『個人としての宗教性を深める』ことにつながる要素をどの位伴っているのか（あるいはそうではないのか）という観点で見極めてみることが肝要となる。だが，現代の若者たちの中で，自分の直面する問題の背後には，宗教性の問題が横たわっていることを自覚し「自分という存在が何かにつながり，何を支えとしているのか，それはどれほどの永続性をもつのかについて考えてみた」ことがあるという者は非常に少ないように思われる。もしそのようなことを自覚し真剣に考えれば，あまりの絶望にうちひしがれてしまうのではないかという予感さえ覚える。あるいは若者たちは無意識的にそのことに気づいているため，この課題に正面から取り組むことを避け，ひたすら卑近で皮相的でかりそめの人間関係を頼みにし，あるいはソーシャルメディアにつながることによって，辛うじて自分の足下が音を立てて崩壊する事態を防いでいるのではないか，という想像すら浮かんでくる。現代の日本における宗教性の問題とは，とても個人の力で克服出来るものではないだろう。

実は先ほどの河合（2001a）の続きに「とは言っても，これは個人で行うのは至難の業である。これを助けてくれるものとして，人間は古くから多くの神話をもっている。神話は宗教性を深めてくれるための素材や方策を提供する。そのうちで自分にぴったりとくるものがあるだろう。（中略）現代に行きようとする個人は，自分に

ふさわしい神話を見出さねばならない，と言うよりは，神話を生きると表現した方がいいであろう。出来合いのものを探し出すのではなく，体験を通じてつくり出していくものなのだ。それは限りなく孤独な道である。しかし，神話を生きることによって他とのつながりができてくるのも事実である。それは有難いことであるが，少し気を許すと安易な集団化の中に埋没することになる」という文章がある。これはこれで確かに至難の業ではあるが，それでもいくばくかの希望は感じられなくはない。しかし，果たして現代において若者は，「神話を生きる」という難事をやりおおせるのであろうか。これは要するに，『崩壊を食い止めるための姑息な手段を放棄して，困難な現実に踏み出し，しかも自分が生きているという実感を自分の心の深い底にまで通底するような，一本芯の通ったような生き方を，一歩ずつ自分の脚で踏みしめている』ような青年像を体現しながら行動することである。もしそれが可能ならば，その時青年の心には自分自身の新たな神話が生み出されてゆくことだろうが，そのような青年たちが巷間に溢れている光景を筆者の脳裏に思い浮かべることはそう容易ではない。

これは筆者が悲観主義者だからということではなく，最近の若者における想像力の乏しさを実感してのことである（今田，2012；2013）。要するに，「意識的で現実的なもの，とりあえず目の前にあるもの」だけを頼りに何とかしよう，という努力はある意味で盛んに行われているのであるが，「無意識的なものや，目の前にはないものをイメージし，それらも加味して自分が何をどう感じ取り，どう生きていくのか」ということについては非常に苦手であり，現実に眼前にないものと想像によってつながったり，そうした超越的な次元とのつながり込みで生きていく（生活を送っていく）ということ自体，最近の若者にとって実感することがきわめて困難な営為のように思われるからである。このことについても，今の若者一人一人の資質が揃って低下した訳ではなくて，少し前までの日本人であれば人生経験の中で何となく，いつの間にか体得されていったことが成立しなくなっている，と考える方が正解であろう。こうした最近の若者の傾向について，岩宮（2013）は「本来，超越的な世界は，イメージを通してつながるものであるが，それが最近は，さほどイメージの力を必要としなくても，ネットという異次元では手軽に手に入るようになってしまった。それはまったく『超越』とは言えないものであるが」と指摘している。要するに，イメージを活性化するという手続きですら現代ではテクノロジーが代行してくれるため，自前でイメージの力を研く必要すらなくなってきているのだということになる。まさに「むべかるかな」としか言いようがない事態が到来しているのである。

また河合（2006）は，「私が思っていますのは，ともかく理由を超えた存在というものがあって，そのはたらきに対して，畏敬の念，畏れの念をもってそれを見るという態度，これが宗教性でありということです」とも述べているのだが，これについても現代の若者が傲岸不遜であるという理由からではなく，現代において「理由を超えて何物かを畏怖する」という姿勢を持ち得るということ自体，甚だ容易ならぬミッションと化しているように思えてならない。

3．今後の日本人の課題を河合隼雄の提言に照らして考える

⑴ 河合が提言した現代日本人の課題

本稿では，河合隼雄が晩年において，日本人にとっての自我の確立，あるいは個人や個性をどのように発揮させていくのかについての展望や提言を示し，これからの現代社会においてそれをどのように生かすのかを考えてみたい。

まず河合（2001b／初出1997）は，「『イエ』や身分などが案外人間の守りのために役だっていたのだが，近代化と共にそれを棄て去ったのはいいとして，いったい日本人がどのような『個性』とか『個人』とかを考えようとするのかについて検討するのをあまりにも怠ってきたのではなかろうか。それを不問にしたままで『個性の尊重』を言ってもはじまらない。ここでわれわれに課せられた責務は，新しい世紀に向かって，これまでより格段と『個人』を大切にする方向に向かって努力をすると共に，それを支えていくべき人生観，世界観を新たに構築していく努力をすることであろう。後者の努力を忘れていては，個性の尊重も結局は掛け声だけに終わってしまうだろう。そして，それが世界の精神史においても，これまでに達成されたことのない新しい世界への挑戦であって，きわめて困難な時期の特徴として，われわれは多くの子どもの問題をかかえているのである。（中略）子どもが提出してくるいろいろな問題は，新しい発見へのきっかけをつくるものである。個性の尊重ということは，一人一人の責任と課題を重くする。制度の改革は必要であるが，それによって個人が楽になるのではない。日本の成人は各人が自分の意識の変革と取り組む覚悟をもたねばならない」と提言している。

また河合（2003a）は，日本人の個の確立について，「西洋で神と個人と両立しがたいものの両立になかから個

人主義が生まれてきたように，日本でも，イエと個人が両立しがたいものの両立をはかることで『イエ』は消えるとしても，イエを支えていたエトスは，日本の個人主義のなかに保持してゆくことは可能ではなかろうか。ここで，個人主義といわず，『個性』と言い換えてみてはどうであろう。人限の生き方として，個人主義かどうかということよりも，その人の『個性』が十全に発揮されていることが大切なのではないか。そういえば，日本人のなかにも，たくさんの個性的な人がいたし，個性的な人が現存している。しかし，その人たちは必ずしも西洋的な意味で『個人主義』ではない。日本人が『個の確立』を考える場合に，西洋近代に生まれてきた『自我の確立』や『個人主義』を真似るのではなく，十分に個性的に生きるという意味での『個の確立』をするのではあるが，西洋近代における『自我』や『個人』とは異なる生き方が考えられ，それはそれで十分に国際的に通用するのではないだろうか。このようなことを探っていくのが，現代に生きる日本人の課題と思われる。（中略）常に全体状況や他とのつながりを意識して，その後に『私』ということを考える生き方は保持しつつ，自分の考えや意見を明確に表現することに努めるべきだと考えるのである」というような，かなり具体的な方向性を示している。

さらに河合（2003b）は，現代日本の課題として，「言うなれば，中心統合構造と中空均衡構造の両立ではないだろうか。両立し難いものを両立させるには，どのようなモデルが考えられるか，という疑問が生じてくる。これについて筆者はずいぶん長く考え続けてきたが，おそらく今世紀においては，ひとつのモデルやひとつのイデオロギーによって，人間について，世界について考えるということは終わったのではないかと思う。（中略）中空均衡構造と中心統合構造の併存とは，両者を無理して『統合』することを試みず，自他を含めての全体状況のなかで，適切な生き方を選択する。それはおそらく，一方の構造に従っている生き方となろうが，なぜそのときにそちらを生きるかを説明することができ，選択に伴う責任の自覚をもっていること，一方を選ぶとしても他方の可能性に対して常に配慮を忘れぬこと，ということになるだろう。これは困難極まりないことは自覚しているが，この困難な課題に立ち向かってゆくことが，現代人の責務ではなかろうか」と述べている。

これらの河合による指摘に共通しているのは，「両立し難いものを両立させようとする」葛藤を抱えるという仕事をやり抜いた先に日本的な「個」の新たな展望が期待される，ということであろう。だがこれは河合自身も言及している通り困難な作業であり，相当な自我の強さが必要になるのではないだろうか。率直な感想として，岩宮（2009；2013）の指摘するような，最近の思春期像に照らし合わせてみた時，河合が見据えていたような課題に取り組むだけのタフネスさを現代の若者に直ちに期待するのは酷なようにも感じられる。現代の若者は，一体感によって自分という存在を根づかせるという力が急速に失われた現代日本社会の中で，狭い人間関係の中で何とか姑息的にではあるが一体感を体験し，辛うじて心の安定を得ようとしている。その努力の連続に疲弊して引きこもってしまったり，自分を支えきれずに心身のバランスを崩す者も少なくない。率直に言って若者たちの現状は「両立し難いものを両立させようとする」作業に取り組むだけの自我の強さを身につけるより遥か手前の段階で，息切れを起こして立ち止まっている感があり，河合の指摘と現実とのギャップをどう埋めていけばよいのか途方に暮れる気持ちすら抱かせる。

⑵ 現代における日本人の課題の克服に向けて

①日本的な自我の強さの模索

しかし，ただ途方に暮れていても仕方がないのであって，何らかの展望を見出したいところである。それにはまず，河合が現代日本社会の問題に取り組むに当たって必要だと考えていたであろう，自我の強さとはどのようなものなのかについて考えてみたい。この自我の強さとは，河合が繰り返し指摘しているように，単に西洋的な自我の強さを持ち込んで強化すればよいというものではないだろう。つまり「日本的な」自我の強さとはどのようなものか，それを具体的にイメージできる例が欲しいのである。そこで些か唐突だが，河合と免疫学者の多田富雄との対談の中で語られたある話題を以下に紹介してみたい（多田・河合，2000）。

＊

河合　先生はお能をなさいますよね。（中略）鼓は，リハーサルというのはないわけでしょう？

多田　申し合わせという簡単なものはありますけれども，完全な形でのドレス・リハーサルはありません。

河合　その場でパッと成立する訳ですね。

多田　ええ。大鼓とか小鼓とか笛とか太鼓とかそれぞれの役が，別々に精魂を込めて稽古をしているのです。それがある日，全員が舞台の上で出会って，お互いに自分の決められたことをやるのです。指揮者もいないし，互いに合わせたり譲り合ったりなんていうことは絶対しません。自分を徹底的に主張し合って演奏すると，最終的に一種の不思議な一体感みたいなものが現れる。日本人に個人主義はないと言われますけれども，お能をやっ

てみると一種の個人主義で成り立った芸術だと思います。決して追従しないし，一緒に合わせようとか横並びになろうなどということはしなくて，それぞれが強烈に自分を表現しようとするわけです。その共感が，ある一瞬成立しますと素晴らしいものになるし，成立しませんとガタガタになる。成立した時のエクスタシーが忘れられないから続けているのではないかと思います。

河合　成立しない時もありますか。

多田　ガタガタになって，誰かが脱落してしまいます。でも，誰も助けません。助けようと思えば，ちょっと自分の間をずらせてやればいいんですが，知らん顔をしてどんどん進んでいってしまう。そうじゃないと自分が脱落する。

河合　私は日本人の個人主義ということにすごく関心があるんです。われわれが西洋の人と当たると，どうしてもあちらの個人主義に負けそうになりますね。（中略）これからわれわれが個人主義の国の人たちと同列にやっていくためには，われわれは個人主義を強く持たねばならない。しかしキリスト教を背後に持っていない。そういう点で，いまのは，すごく面白い例ですね。西洋人のアンサンブルとは全然違う。

多田　実際に能の舞台に出ていますと，指揮者がいませんから，誰に従っていいのかわからない。そうすると，自分の「間」でやるよりしかたがない。その「間」は，メトロノームで刻めるような「間」ではありませんから，それぞれの個人の所有物としての「間」です。もちろん，相手の呼吸を計るとか，そういうやりとりはあるのですけれども。他人の情報を読み取りながら自分の「間」でやっていて，それがぶつかりあった時，立体感のある非常に刺激的な音楽ができます。

河合　（前略）西洋人の場合にまとまるというのは中心があるということが前提です。中心がない限り，まとまらないと思っている。ところが東洋的な場合は，中心不要でまとまり得るのではないでしょうか。

多田　中心がないにもかかわらず，一種の一体感ができるわけです。

河合　その時に，もちろん言語化もできないし，原理ではないのだけれども，その前に存在している一体感というのはあるのでしょうか。つまり，みんなが「お能をやります」と舞台に上がった時に一体感が成立するということですが，西洋の人にそれをやれといったら，ものすごくむずかしいのではないでしょうか。

多田　できないかもしれませんね。

河合　「協力」という言葉を使ったら，もうだめですね。言語化以前の，この場にいるということが必然的に一体感を生じせしめるようなカルチャーですね。（中略）それでもわれわれは今の社会に住んでいるわけですね。けっこう西洋文明の恩恵をいっぱい受けて生きている。そして，片方では最先端でIT革命とか言ってやっている。日本だって対抗していかなければならない。そういうことをやりつつ，今話した言語以前のわれわれが持っているものをもっと洗練させるとか，それをキープすることは，可能だと思いますか。

多田　日本の文化の中には，その芽があると思います。お能で「一座建立」とか，お茶でも「一期一会」とか，そういうことを言われると癪にさわるけれども，その意味はわかりますね。決められたルールに従ってやればすべてうまくいくのではなくて，集まった人がお互いに情報を発信し合って，その結果うまくいくというのが「一座建立」だと思うのです。（中略）つまり，秘密を共有して，その中で一種の一体感をつくり出すということではないか。日本人がものを伝承するために型というものを作りましたね。型に依存した伝承の仕方をしていけば，当然のことながら洗練されてくる。それで「一座建立」などといった非常に高度な理念的なものになったのではないでしょうか。

河合　日本の文化は面白いものをまだまだ持ちながら近代化しているわけですけれども，私はやはり両立をはかるべきだと思っています。

多田　（前略）お能の「間」というのも，おおもとまで戻っていくと，宴会で侍とか貴族などが歌った歌謡から始まっていると思いますけれども，それがだんだん複雑化していって，いまのように非常に宇宙的なものまで表現できるようになったと思うのです。初めは，極めて楽しい日本人の心の風景みたいなところにあったリズムなのではないか。そこまで戻ってもう一回見たらおもしろいだろうな，という気がします。これから共同で何事かが始まるぞという覚悟は全員がもちますけれども，「協力してやりましょう」なんてことは誰も言いません。

＊

いかがであろうか。多田の能楽における経験談を通して，日本的な自我の強さの一端が垣間見えたのではないだろうか。そこでは決して日本流の「気配り」や「空気を読んで」相手に合わるようなことはせず，各々が自分の間合いで表現し，強烈に主張しつつ，それでいてうまく場が成立し，充実感が実感されるという実例が示されているのである。ここで大切なのは，各々が表現しようとしているのが「自分が精魂込めて打ち込んできたもの」

であることと，何より「これから共同で何かが始まるぞ」という覚悟を全員が持つということなのであろう。

②思い込みを「断ち切る」ことで「つながる」～「恐れ」から「畏れ」へ～

鎌田東二は，先に紹介した河合も参加したシンポジウムのパネル・ディスカッションにおいて「かたちがどのように変化しても，根っこと完全に切れているわけでは絶対にない。切れているのは，私たちの意識や感じ方，ものの考え方」であって，生命そのものは実に深いところまでつながっている。そうすると，切れているとわれわれが思っている思い込みを断ち切って，根っこのところへぐっと掘り下げていくようなチャンネルというか，感性や想像力をもつことができたならば，次への展開が生み出されるのではないか」と述べている（河合・鎌田・山折・橋本，2006）。鎌田の言を信じるならば，「現代において日本人の一体感が切れている」という，冒頭で筆者が挙げたような感じ方自体が「思い込み」なのであり，自分の生命の根っこまで掘り下げていく想像力を持つことで，次の展開が生み出されることは十分に期待されるのである。先に多田が対談で述べている「自分が精魂込めて打ち込む」という姿勢とは，言い換えれば（能の鼓の稽古に打ち込むことを通して）自分を根っこのところまで掘り下げていこうとする方向性であり，鎌田の指摘していることとベクトルが一致しているように思われる。

現代の若者にとって，他者との関わりが「自分の心にぽっかりと空いている不安を埋め合わせるため」という動機から生じている場合が多いと思われるが，それでは残念ながら不安を埋め合わせることは「原理的」にも決して叶わない。何故なら「自分の不安を解消したい」という姿勢の背後には，「自分と人とのつながりが切れてしまっているのではないか」という「思い込み」がとても強固に存在しているため，不安を解消しようと努力すればするほど，「思い込み」を強化することにつながるからである。現代の若者が孤独を恐れ，何とか「他者によってかりそめにでも構わないから自分を支えて欲しい」と願い，その結果として人間関係の中で過大なストレスに苦しんでいるのは，やむを得ざる必死の取り組みであるように見えて，同時に「自分はつながりから切れてしまう」という思い込みをも強化し続けるため，決して自我の強化をもたらさない。その故に方略としては間違っており，どこまでも自己疎外に向かっていく，いわば「呪われた道」あるいは「自分で自分に呪いをかけてしまう道」なのである。

鎌田が指摘するように，「つながっていない」と感じて，「何とかつなげよう」とすること自体が『思い込み』なのである。そうだとすれば，『思い込み』を断ち切り，自分の根っこのところまで掘り下げていくことで「実はつながっている」ことに気づくことによって，自己疎外や孤独から開放されるというイメージはまさに闇の中の一筋の光明である。何やら禅の公案めいているが，『つながらない』ことを『恐れる』のではなく，『実はつながっている』ことに気づき『畏れる』ことへ至るように自分を掘り下げていくことこそ正しき道なのである。またその筋道は，構築されたアルゴリズムをワンステップずつ進めて，最後にゴールに至るようなものではなく，自分の素朴な実感とは矛盾するメッセージを与えられ，それでも「矛盾だ」と放逐したりせず，一見矛盾して見えるそのメッセージが矛盾なく成立する深さまで自分を掘り下げることに真摯に打ち込み，またそれを躊躇せず表現することを通して，一瞬にして認識が反転し，当初は矛盾としか思えなかったものが矛盾せず，確固として成立する地平に自らがその足で立っていることに気づくようなプロセスをたどるのではないだろうか。ただし，「つながっていないと見えたものがつながっている」ことを実感するための取り組みには途方もないエネルギーを要するのではないかという指摘も受けるだろう。それについては河合（1998a）の「『自分探し』については，何をどのように語ってもパラドックスがつきまとう。それは『失せもの』を探すように，どこかでそれが『見つかった』などということはなく，その過程にこそ大きい意味があるのであろう。『見つからない』ものを探し続ける強さが『自分探し』には必要と思われる」という言葉を引用しておきたい。また，このプロセスは何も理詰めで合理的に判断し，選択して取り組むという契機によって発動するというより，河合（1997a）が「日本人が倫理的決定を行うとき，それを『私の倫理観』という表現をせず，『私の美意識』という言葉を用いることが多いのではなかろうか」と述べ，日本人の生死の決定にすら『美意識』が大きく作用するということが活路を開くかもしれない。美意識は『姿』が問題なのである。『みっともない』と感じる」ことが結果的に倫理的な判断につながっていくのが日本の方法なのであることを説明しているが（河合，1997a），このことは岩宮（2009；2013）の報告した現代の若者にも共通していて，『美意識』を判断の拠り所にしている様子が確かに認められる。「良いことだから」「必要だから」といった論理的に筋の通った理由によるのではなく，美意識を刺激され「そうせずにはおれない」という判断や行動といかに結びつけることが出来るのかが意外に鍵となってくるのかもしれない。

4．おわりに

今回，現代の若者の心を覆っている不安と，それを何とか解消しようとして必死なあまり，大人の世代からは奇妙に感じられる若い世代の心理や対人関係について，主に河合隼雄の晩年の日本文化論を参考にして理解を新たにし，どのような解決の方策があるかについて論考を行った。現状で若者たちの自我は弱く，河合が現代の日本人が抱える問題を克服する場合に前提としている自我の強さを獲得するに至っておらず，課題の克服に取り組むどころか，疲弊して回避的な状態に陥っているように思われた。しかし日本的な自我の強さが顕現する可能性について示唆するエピソードが見出され，不安の解消という動機で「つながりが切れているのを何とかつなごうとする」のではなく，つながりが「切れている」という思い込みを「断ち切り」，根っこでは「つながっている」ということを再発見することに精魂こめて取り組むことに活路を見出し得ることの可能性が示唆された。

引用文献

土井隆義 「個性」を煽られる子どもたち－親密圏の変容を考える．岩波ブックレット No. 633　2004

今田雄三　臨床心理学の実践教育における今日的課題－「型」へのコミットメントから「主体的な」コミットメントへ－．鳴門教育大学研究紀要　人文社会学編　27　2012　184－198

今田雄三　セラピスト養成における現代的な問題とその対応－関係性が成立困難な時代に育った世代への指導を通して－．鳴門教育大学研究紀要　人文社会学編　28　2013　307－320

岩宮恵子　フツーの子の思春期－心理療法の現場から．岩波書店　2009

岩宮恵子　臨床現場から見る「ひきこもり」．河合俊雄・内田由紀子編 「ひきこもり」考．創元社　2013　pp131－157

鎌田東二　指定討論 日本の伝承文化における宗教．河合隼雄・鎌田東二・山折哲雄・橋本武人　日本の精神性と宗教．創元社　2006　pp58－73

河合隼雄　母性社会日本の病理　中央公論社　1976

河合隼雄　中空構造日本の深層　中央公論社　1982

河合隼雄　アミニズムと倫理．河合隼雄・鶴見俊輔共同編集　現代日本文化論９ 倫理と道徳．岩波書店　1997a　pp275－295

河合隼雄　宗教と宗教性．河合隼雄・中沢新一共同編集　現代日本文化論12 内なるものとしての宗教．岩波書店1997b　pp225－243

河合隼雄 「私」探し．河合隼雄・村上陽一郎共同編集　現代日本文化論１ 私とは何か．岩波書店　1998a　pp251－274

河合隼雄　震災と「一体的人間関係」．河合隼雄　日本人の心のゆくえ．岩波書店　1998b　pp1－19

河合隼雄　現代における「神話」の役割．河合隼雄　日本人の心．潮出版社　2001a　pp13－31

河合隼雄　日本の教育の底にあるもの．文藝別冊河合隼雄．河出書房新社　2001b　pp137－151.（『中央公論』1997年10月号初出）

河合隼雄　人にとって宗教はなぜ必要か．河合隼雄・加賀乙彦・山折哲雄・合庭惇　宗教を知る人間を知る．講談社　2002　pp39－68

河合隼雄　日本文化と個人．河合隼雄編著 「個人」の探求　－日本文化のなかで－　NHK 出版　2003a　pp3－16

河合隼雄　神話と日本人の心．岩波書店　2003b

河合隼雄　基調講演 日本の精神性と宗教．河合隼雄・鎌田東二・山折哲雄・橋本武人　日本の精神性と宗教．創元社　2006　pp11－54

河合隼雄・鎌田東二・山折哲雄・橋本武人　パネル・ディスカッション 日本の精神性と宗教．河合隼雄・鎌田東二・山折哲雄・橋本武人　日本の精神性と宗教．創元社　2006　pp105－152

河合隼雄　関係性について（二〇〇五年度学校臨床心理士全国研修会講演）．村山正治・滝口俊子編　事例に学ぶスクールカウンセリングの実際　創元社　2007　pp3－28

河合隼雄　河合隼雄ラストインタビュー．文藝別冊河合隼雄＜増補新版＞．河出書房新社　2013　pp243－255.（インタビュー＝2006年７月／『論座』2008年１・２月号初出）

中沢新一・河合俊雄編　思想家河合隼雄．岩波書店　2009
多田富雄・河合隼雄 「脳」から離れて．河合隼雄編　講座心理療法４ 心理療法と身体．岩波書店　2000　pp 201－223

The source of anxiety among young people nowadays

—— seeking methods to build ego–strength in Japanese way ——

IMADA Yuzo

（Keywords : today's society, adolscence, anxiety, a sense of unity, religiosity）

Young people in today's society often struggle to eliminate their strong anxiety in peculiar psychosocial relationships, which sometimes seems strange to older generations. In this paper, the author developed a new understanding of such relationships and considered solutions with the help of Hayao Kawai's discussion of Japanese culture in later life. Kawai implied the possibility of Japanese way to build ego–strength in some episodes. To eliminate anxiety, the author suggested that the important point was not "to restore broken relationships" but "to overcome the belief that relationships had been broken", and the process "to discover unbroken relationships at the core" needed to be addressed.